The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Syntax and Semantics of Clausal Comparative Constructions
Author(s)	樺沢, 真由美
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60058
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【16】

氏　　名	樺沢（吉本）真由美（かばさわ まゆみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２６０５９　号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	The Syntax and Semantics of Clausal Comparative Constructions （節比較構文の統語と意味）
論文審査委員	（主査） 教　授　大庭　幸男 （副査） 教　授　岡田　禎之　　教　授　加藤　正治　　教　授　神山　孝夫

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、英語と日本語の節比較構文における統語構造と意味解釈プロセスについて議論する。節比較構文には２種類あり、１つはthanに後続する節（これを比較節とする）に動詞の目的語が省略されている場合（たとえば、John invited more men than Bill invited/did.）と、もう１つは比較節の目的語内にある「程度」を表す修飾語が省略されている場合（たとえば、John invited

more men than Bill invited/did women.）である。本論文では、前者をOrdinary Comparatives (OC)、後者をSubcomparatives (SC)と呼ぶ。本論文の目的は、英語と日本語におけるOCとSCの統語構造と意味解釈プロセスを解明することである。全体は６章からなり、総頁数は英文でA4判180頁（400字詰め原稿用紙に換算して約540枚に相当する）である。

第１章では、英語の節比較構文に関する先行研究を検討する。従来の研究では、OCとSCの統語的相違点に基づきこれらの統語構造が提案されてきた。しかし、このような分析では、OCとSCの特徴をすべて捉えることができないだけでなく、理論的な問題も生じる。本章では、OCとSCに見られる共通点と相違点を明らかにし、先行研究の問題点を指摘する。

第２章では、先行分析の代替案として、OCとSCの比較節内で異なった位置からの非顕在的な空演算子（Degree Phrase、以下これを DegPとする）の移動が見られると提案する。具体的には、OCではこのDegPが目的語の位置から名詞句全体を伴ってCP指定部に移動し、SCではDegPのみが目的語の名詞句内からCP指定部に移動すると提案する。これにより第１章で見たOCとSCの統語的特徴が捉えられる。しかし、SCにおけるDegPの移動はLeft Branch Condition（LBC）に逆反するので、このDegPは名詞句内からではなく、動詞句を修飾する副詞の位置から移動すると提案する。なお、この提案はSCのDegPが副詞的な役割を果たす事実からも裏付けられている。

第３章では、第２章で構築した統語的構造に基づき比較構文の意味解釈プロセスを探る。具体的には、Kennedy (1999)の提案する「測量関数分析」に修正を加えることでOCとSCの解釈方法を示す。Kennedyによると、節比較構文に用いられる段階形容詞は、測量関数をその意味に含んでいる。この測量関数を用いた節比較構文分析では、主節に存在する段階形容詞と比較節に非顕在的に存在する段階形容詞が、それぞれの節で「度合い」を出し、その程度差を比較するという構造が示される。本論文では、このような測量関数分析の利点を提示し、OCとSCの統語的特徴と意味的特徴を考察した上で、SCでは「個体」に写像するのではなく動詞句の示す「イベント」に写像すると提案する。これにより、第２章で示した統語構造に即した意味解釈プロセスを構築するだけでなく、SCの容認性条件を捉えることも可能となる。

第４章では、日本語の節比較構文を考察する。まず、日本語の節比較構文の先行研究を概観し、それらの問題点を指摘する。先行研究では、日本語の比較節は外見では「節」の構造を成しているが、実際は「節」ではなく「名詞句」である、とされている。本論文では、様々な節比較構文の統語的特徴と意味的特徴を観察することにより、日本語の比較節は「名詞句」ではなく英語と同様に「節」構造を成していると主張する。そして、日本語の比較節でも比較の「度合い」を返す関数が存在すること、すなわち、非顕在的な段階形容詞が存在することを提案する。

第５章は、第４章の提案に従い、非顕在的な段階形容詞を含む統語構造と意味解釈プロセスを提案する。まず、日本語のSCの容認性にはDegPと動詞句の意味的な結びつきが関わるが、OCの容認性にはDegPと動詞句の結びつきは関わらないという事実を指摘する。次に、この事実から日本語のOCの比較節でも、英語と同様に、DegPが目的語位置に基底生成され、その位置からCP指定部に顕在的に移動するが、SCではDegPが副詞の生起する位置に基底生成され、その位置からCP指定部に顕在的に移動すると主張する。そして、段階形容詞のもつ測量関数と非顕在的に存在する比較形態素のもつ関数を提示し、それにより上記のような統語的派生に従った意味解釈を構築する。最後に、この提案により日本語のOCとSCの容認性条件が説明可能になることを示す。

第６章では、本論文の結論と今後の研究の展開について言及する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、生成文法理論と意味論の測量関数分析を用いて英語と日本語の節比較構文の統語構造と意味解釈のメカニズムを解明しようと試みている。とりわけ、節比較構文の統語構造を明らかにし、その構造に関する情報に対応づけて測量関数分析を合成性の原理に従い適用することにより、両言語の節比較構文の意味解釈プロセスを統一的に構築することを目指している。

本論文の評価すべき点は次の通りである。まず、英語のOCとSCについては、DegPがそれぞれ項位置と動詞句付加位置に基底生成され、その位置からCP指定部に顕在的に移動すると仮定することによって、これら２つに認められる様々な統語的な類似点および相違点を統一的に説明している。また、段階形容詞の測量関数分析を個体からイベントに拡張して、SCのDegPがVP副詞として機能することを裏付けるとともに、DegPをVP副詞句であると仮定することによりDegP移動がLBCに逆反するという問題を解決している。次に、日本語のOCとSCについては、先行研究の主張と異なり、比較節は英語と同様に節構造をなしており、その中に「程度」を出す段階形容詞がDegP内に非顕在的に存在し、そこから顕在的にCP指定部に移動すると仮定することにより統語的な現象（たとえば、島の効果など）を説明している。また、比較節に非顕在的な段階形容詞を仮定することにより、それがもつ測量関数を介して比較節の「基準度合い」を導き出している。さらに、SCにはDegP内にある段階形容詞の測量関数がVPの示すイベントに写像すると仮定することにより、SCのさまざまな容認可能性を適切に説明している。そして、英語と日本語のOCとSCについては、統一したメカニズムにより両言語のOCとSCの意味解釈を適切に構築している。

以上が評価すべき点であるが、本論文には問題がまったくないわけではない。たとえば、英語や日本語のSCには、比較節のDegP内にある非顕在的な段階形容詞の測量関数がVPの示すイベントに写像すると仮定しているので、VPがイベントを表さない場合にはSCが存在しないことを予測する。また、この仮定は、VPの表すイベントが複数回生じる場合と１回のみ生じる場合とでは、SCの容認可能性に違いが生じることを予測する。しかし、この予測には反例が見られる。したがって、DegP内の非顕在的な段階形容詞の測量関数がVPの表す事象に写像する場合、その写像の在り方にさらなる精緻化が必要であろう。また、本論文の分析に従うと、SCは通常の並列構造からはかなり異質な性格をおびることになるので、その特異性を示す理由や、異質にもかかわらず並列構造の一種としての比較構文として何故容認できるのか、についてもさらに議論する必要があろう。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。